

日時 10月3日(金) 15:30～17:30

会場 奈良県社会福祉総合センター 大会議室

子どもたちを被害者にも加害者にも傍観者にもさせないために

分科会9は、子どもたちを取り巻く暴力の問題が近年ますます深刻化しているという現状認識に基づき開催されました。分科会の目的は、現状の情報共有を通じて、大人が知っておくべきこと、そしてDVや性暴力のない社会の実現に向けて、子どもたちに何を伝えていくべきかを話し合うことにあります。

登壇者

 コーディネーター兼パネリスト：^{かざみ よしみ}風味 良美（参画ネットなら）

 パネリスト：^{なかたに なおこ}中谷 奈央子（性教育学講師・思春期保健相談士）【zoom参加】

^{よしかわ}吉川 ヒロ（tomoni. 共同代表）


I. 自己紹介、活動内容及び子どもたちの現状等

<風味 良美>

1. 団体の成り立ちと活動の紹介

参画ネットならは2007年に奈良県の男女共同参画の実現のために結成されました。主な活動の柱はデートDV防止教育、命の安全教育、そして相談活動で、子どもたちを被害者にも加害者にも傍観者にもさせないことをめざし、県内の小中高で出前講座を実施しています。メンバーにはDV被害の経験者であり、予防教育の重要性を痛感して資格を取得し、活動に加わっている者もいます。

2. 子どもたちのジェンダー平等意識と課題

DVや性暴力はジェンダーに基づく暴力です。子どもたちは「ジェンダー平等」という知識を頭では理解しているものの、具体的な生活や行動の場面で社会構造の現状や根深く残る慣習、ジェンダーバイアスとのギャップに戸惑いや疑問を抱いている実態があります。



ジェンダー平等に対する考え：

デートDV防止講座を受講後、アンケートにあがって来る感想は、ジェンダー平等を肯定的にとらえるものもあれば、「ジェンダー・ギャップ指数は欧米の価値観であり日本とは価値観が違うところがある」「家の考えと違うところもあった」など、かなり否定的にとらえるものまでさまざまです。

伝え方の工夫：

ジェンダー平等教育やデートDV防止教育は、男子への逆差別といった感情的な反発が見られるケースもあり、関係者間では伝え方について、継続的な工夫と努力が続けられています。

3. 若年層における性暴力被害の深刻な実態

内閣府男女共同参画局が2022年6月に実施した、若年層（16歳から24歳）への性暴力被害の実態に関するオンライン調査結果が以下のようになっています。

被害の割合：

2,040人の回答者のうち、約4人に1人が何らかの性暴力被害に遭ったことがあると回答しており、若年層における被害の深刻さが浮き彫りとなりました。

最大の発生場所：

性暴力被害に遭った場所として最も多かったのが学校であり、加害者は学校の教職員、先輩、同級生、クラブ活動の指導者など、日常的に接する学校関係者が多数を占めています。

性暴力の内容：

言葉による性暴力が38.8%、身体接触を伴う性暴力が28.2%と、多様な形の性暴力が若年層を脅かしている状況です。

<中谷 奈央子>

1. 自己紹介と活動の経緯

私は思春期保健相談士として、主に学校現場を中心に性教育に携わる活動をしています。

活動を始める前は、三重県の公立高校で養護教諭（保健室の先生）をしていました。その養護教諭時代に、性のことに悩みや傷を抱える生徒に多く出会ったものの、当時の自分には「困ってから、傷ついてから、何かが起きてからの話を聞くことしか」できなかったという後悔が、今の活動の原点にあります。この後悔から、「もっと前にできることや、伝えられることはなかったのか」と考え、専業主婦を経て、現在の性教育を仕事とするに至りました。現在は、学校での講演のほか、執筆活動も行っており、例えば『10代の妊娠』といった本の執筆や、様々な作品の制作協力にも携わっています。



2. 学校現場における性教育の実態

児童・生徒の年齢に応じて、伝える内容と形式を工夫しています。

高校：人数が多いことから、講演会形式が中心となります。扱う内容は、避妊、性感染症、デートDV、性暴力など、踏み込んだ話がほとんどです。講演後には、コンドームなどの実物を用いて生徒と話をしたり、個別の相談に応じたりすることもあります。

中学校：こちらにも講演会形式が多いものの、デートDVや人間関係の問題、境界線と同意、そして「よい関係」とは何かといった、より身近なテーマを扱うことが多いです。

3. 子どもたちが直面する現状と必要な感覚

子どもたちを性暴力の被害者にも加害者にもしないためには、まず子どもたち自身が「自分は大切にされている」という感覚と、「自分の体は自分のもの」という感覚を持つことが重要です。この感覚が基盤となって、他者に対して境界線（バウンダリー）を意識し、同意（コンセント）を大切にできるようになるはずです。

<吉川 ヒロ>

1. 自己紹介と活動内容

2012年頃から、性の多様性の啓発活動に取り組んでいます。

主に学校現場を中心に活動し、性の多様性やジェンダー平等を切り口とした、人権や「違いがあってもいい」というメッセージを伝える講演や授業を、子どもたちや先生方に対して行っています。また、大阪府内の一部の自治体や団体において、性的マイノリティ当事者の相談窓口の相談員も務めています。

さらに、友人とともに「tomoni.」というユニットを立ち上げ、性の多様性も含んだ目に見えない違いについて子どもたち同士で話し合うワークショップの企画・実施や、性的マイノリティ当事者とアライ（支援者）の方々が集まる企画の運営にも取り組んでいます。



2. 性の多様性に関する学校現場の現状

学校現場での活動を通して、子どもたちが直面している具体的な課題と、それに対応するための支援のあり方について報告します。

子どもたちの多様なセクシャリティ：

身体的な性の特徴（セックス）、自認する性（ジェンダー・アイデンティティ）、好きになる性（性的指向）は、人によって様々であるという性の多様性に関する教育は、子どもたちにとって非常に重要です。

特に、性的マイノリティの子どもたちは、男女二元論や異性愛前提の環境の中で「自分は特別な存在だ」と感じてしまうことで、周りの環境から距離を置いてしまい、困っていることや悩んでいることを「特別なこと」として誰にも相談できず、孤立してしまう傾向にあります。

教育現場における課題：

学校教育においては、性の多様性に関する情報や指導が不足している場合が多く、また、教職員側にもリテラシーの不足や無意識の偏見が存在することが課題です。

子どもたちの孤立を防ぐためにも、学校全体で「どんな子でも困っていることがあれば、いつでも話を聞くよ」というメッセージを繰り返し発信していくことが重要です。

II. 今後の課題及び提案

<風味 良美>

1. 今後の課題の明確化

若年層の性暴力被害の最大の発生場所が「学校」であるという事実は、子どもたちが安心して生きられる社会を実現するために喫緊の課題として、以下の点に取り組む必要があります。

①学校における安全性の確保：

教職員・指導員による加害を防ぐためのリテラシーの向上。また、子どもたちには性暴力の根底にある間違った認識や行動、また、性暴力が及ぼす影響などを正しく理解し、お互いを尊重する態度などを発達段階に応じて身に付けるための「生命（いのち）の安全教育」を推進します。

②包括的な性教育の推進：

身体や生殖の仕組みを教えるだけの性教育ではなく、人権や人間関係、性の多様性、ジェンダー平等、幸福など幅広いテーマを含む包括的性教育を推進します。

③大人の意識改革：

DVや性暴力のない社会の実現に向けて、子どもたちが被害者にも加害者にも傍観者にもならないよう、大人がまず現状を深く知り、暴力の根絶を基盤とする社会を構築していく責任と、子どもたちに明確なメッセージを伝えていく姿勢が不可欠です。

2. 社会への提案

本分科会を通じて、「安心して生きられる社会にするための今後の課題や提案」について、パネリストや参加者と共に議論を深め、DV・性暴力のない社会をめざすために学校・地域・行政が連携し、私たち一人ひとりが具体的な行動につなげていきたいと考えています。大人が担うべき責任と、社会全体での意識改革の必要性を明確にすることで、若年層の安全と人権を保障する社会の実現をめざします。

<中谷 奈央子>

1. 身近な大人による境界線意識と同意の尊重

子どもが成長の過程で、「嫌」と感じたときに「嫌」と伝え、それを身近な大人に受け止めてもらう体験を日々の中で繰り返し行うことが極めて重要です。これにより、「嫌」と言っても関係が壊れるわけではないという安心感を子どもが獲得し、他者との健全な境界線を意識できるようになります。

2. 性をタブーにしない環境づくり

小さいうちから、「性をタブーにしない環境づくり」を心がけるべきです。

ポジティブな対話：

体や性の話をポジティブな話題として扱うことが大切です。

子どもの発言への対応：

子どもから質問があった際に、大人側が「怒らず、逃げず、嘘をつかず」に向き合うことで、「性はタブーではない」という明確なメッセージを子どもに伝えることができます。

日常でのキーワード：

「人は個々に異なり、それぞれに素晴らしい」というキーワードを日常会話の中で伝えていくことも有効です。また、子どもの発言を「何言ってるの」と否定するのではなく、「面白いこと気づいたね」「いい質問だね」とポジティブに受け止めることで、環境の雰囲気は大きく変わります。

3. 思春期におけるコミュニケーションの工夫

思春期に入ると、性に関する話をしづらくなるという課題が生じます。この時期には、直接的な会話が難しくても、以下のような工夫により情報を伝えることが必要です。

間接的な情報提供：

本を渡す、LINEで情報を送るといった方法や、テレビや動画を見ながら「これってそうなんだよ」

とひとりごとのように話す「突っ込む性教育」も効果的です。

「アイメッセージ」の使用：

伝えたいことがあるときは、子どもの行動を責める「なんであなたはこうなのよ」という「ユーメッセージ」ではなく、「私はこう感じるよ」という「アイメッセージ」で伝えることで、関係性を壊さずに真意を伝えることができます。

<吉川 ヒロ>

1. 日常的な「男女分け」の見直し

性的マイノリティ当事者や、性別違和を持つ子どもたちにとって、日常生活における過剰な「男女分け」や異性愛規範が、最も大きな生きづらさの原因となっています。

服装・髪型の規定の見直し：

服装や髪型を男女で分けるのではなく、性別を問わず制服を選択できたり、男女ではなく髪の長さなどで規定を定める学校が増えてきていますが、この流れをさらに推進する必要があります。

イベントにおける配慮：

卒業式や合唱コンクールなど、男女で役割や列を分けるシーンにおいて、男女混合の出席番号順にしたり、「男女の区別は関係なく、好きな方を選んでいいよ」という選択肢を提示することが、子どもたちの心の負担を減らすことに繋がります。

2. ハラスメント防止と相談窓口の設置方法の提案

子どもたちを被害者・加害者・傍観者にしないために、日常的な配慮や制度の見直し、そして教育を積み重ねることで、多様な子どもたちが、孤立することなく安心して自分らしく生きられる社会をめざすべきです。

相談窓口の提示方法の工夫：

「性別に関する悩み」という形式で相談窓口を設けると、セクシャリティに関する相談がカミングアウトとほぼ同時になってしまい、特に大人に相談するハードルが極めて高くなります。そこで、例えば「服の着替えがしにくい」「体に傷や痣がある」など、様々な理由で起こり得る困りごととして相談窓口を設け、特定の性別やセクシャリティに限定されない形にすることが効果的です。

重要なのは、相談に来た人にだけ情報を与えるのではなく、「いつでも、誰でも話を聞く」「一緒に考える」というメッセージを全体の場所で繰り返し発信することです。

傍観者への関わり（バイスタンダー教育）：

性に関わる「からかい」や「茶化し」が起こった際に、周囲にいる人がどう関わるかという「傍観者（バイスタンダー）」の役割の重要性を、学生に伝えていくべきです。

「それはやめなよ」と一言声をかけることや、教師などの権力者に報告するといった具体的な行動の選択肢を示すことで、子どもたちを傍観者にしないための環境を整備することが重要です。

Ⅲ. 質疑応答

(色字は質問)

参画ネットならの活動について教えてください。

風味 活動開始当初、学校現場への導入に苦慮しましたが、県との共同事業に応募し採択され、現在は奈良県からの案内を通じて学校で講座を実施しています。講座のファシリテーターは、

DV根絶には予防教育が不可欠という考えのもと、民間団体「アウェア」が養成する認定資格を取得しています。

教師や親などの権力差がある中での被害をどう防ぐべきか、また子どもを加害者にしないための教育について教えてください。

風味 昨年、児童生徒への性暴力で処分された教師は157名になります。幼児期から境界線や同意を学ぶ「生命（いのち）の安全教育」を大人が進める必要があります。

中谷 学校は被害防止に偏りがちですが、人権ベースの加害予防教育はまだ不十分です。私はNOを伝えることと同時に、それを受け止める（拒絶＝人格否定ではない）教育をセットで伝えています。

吉川 小学生向けに同意を学ぶ絵本を活用し、NOと言う練習とNOと言われたら止める練習を両方行う実践例もあります。

保護者の抵抗や教職員の理解不足、教育課程の過密化に伴う「生命（いのち）の安全教育」についての授業時間の減少についてどう感じていますか？

中谷 性教育への反対は一部で、学校での教育を望む保護者が多いのが実情です。しかし、大人を理解を深めることに関しては厳しい現状もあり、例えば三重県では性の多様性に関する教職員研修は進んでいますが、性暴力予防の研修はまだ圧倒的に少ないです。

吉川 教職員研修は単発になりがちで、その後の検証が難しい現状があります。英語やICT教育の導入で現場は多忙化しており、人権教育の枠が削られていると感じます。

包括的性教育を広める工夫や、デジタルサービスの活用、AI相談の是非は？

中谷 性教育という言葉自体のイメージチェンジを図るため、ニュース等の身近な話題から興味を持ってもらうことが大切です。デジタルサービスで言えば、若者向けサイト「セイシル」や保護者向け「命育」などの信頼できるソースの活用を勧めています。

吉川 性教育は「暮らしや人生」の話だと伝えています。AI相談については、共感的な回答に救われる面もある一方で、正確性に欠け、もっともらしい嘘をつく不安があるため、複数の情報源に当たることが大切です。

風味 包括的性教育については、1回の講座で子どもたちの行動を変えることは難しいので、発達段階に応じた繰り返しの教育が不可欠だと感じています。



分科会9 提言

子どもたちが性教育という言葉のイメージにとらわれず、ジェンダー平等というものをもっと身近に感じられるようになることが理想です。

学校・地域・行政 そして、私たち一人ひとりが連携して取り組み、人権の尊重を基盤とし、幅広い内容を体系的に学ぶ「包括的性教育」を実施し、ジェンダー平等を実現していきましょう。